

---

生きる。

霖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生きる。

### 【Nコード】

N2859BA

### 【作者名】

霖

### 【あらすじ】

空間を操る少女、モノを燃やす麗人、視ることの出来る生徒会長、跳躍する殺人鬼。世界人口の1%が異能を発現する世界で、また一人異能者が誕生する。それは「生きる」という、異能。文章で纏めることに慣れていない為、稚拙な文章になるかと思いますが、読んで頂けたら幸いです。

「死ねませんから。可愛い妹を残して死ぬなんて、兄じゃないですよ」(前書き)

聞いてくれてありがとうございます！

楽しんで頂けたら嬉しいです！

「死ねませんから。可愛い妹を残して死ぬなんて、兄じゃないですよ」

光を遮るように入り組んだ路地裏。

真つ暗な闇は、ここに在るモノを隠すためか。

何も見えない闇に一筋の光が差し込むそれは、明らかに異質。

黒の中で不自然に輝く銀は、黒々とした赤を付着させている。

雨が静かに流れる中に、ナニカの声が木霊した。

「ああ、足りないなあ」

それは、とても穏やかな音。

なのに、とても不快な音。

「ハズレを引くのも慣れたね。明日には、満ちるかな？」

感情の読みとれない声を残して、ナニカは闇から静かに消えた。

5メートル以上を跳び越えるという、人間離れの跳躍で。

「なあ透とお、異能を使うのに何かコツみたいなものってある？」

同じ布団に男と女。

見つめ合いながら抱き合っているのを周りから見たらどう思われるかと思うと、体に熱を持ってしまいが、男が顔を赤らめるところなんて見たくないだろうから（少なくとも僕はそう思う）表に出さないように頑張ることにした。

そもそもそういつい関係には為り得ない訳だし。

「いきなり何だよ兄貴。ていつか、兄貴ってチカラ使えたっけ？」

そう、僕は日野谷透ひのやの兄なのだ。

透き通るような肌に綺麗な黒髪、燃えるような眼。

一応言っておくが、燃えるようなとは比喻であってちゃんと黒目だ。

鼻根目無しに抜群の容姿とスタイルを持っている、特殊な性癖を持っている人達を考慮しても10人中8人が目に留めるだろう凄**い**美少女。

16歳にして既に美女に片足突っ込んでいる気がしないでもないが、性格面では勝気な年相応の女の子だと思う。

このままだと思考が変なところに行きそうだから、戻ることにする。

まあ、僕はこの美少女の兄という訳なのだ。

名字が違うという種**の**王道的な役が僕なのだが、残念ながら（？）しっかりと血は繋がっている。

僕はカクンと首を傾げる妹の質問に答える。

「最近、使えるようになったんだよ」

「ふうん。兄貴、良かったじゃないか」

「透から聞いたっていうのに、随分と適当な……」

「俺のことじゃないし」

「その俺って言うのはやめにしよう。そろそろ男口調を直してもいいと思うよ僕は」

物心ついたときから男口調なのは、誰の影響か。

僕のせいではないはずだ。

俺なんて、一日しか言ったことがないから。

「治らないよ。これは病気みたいなものだ。いや、こんなことを話す気は無いよ。兄貴のチカラについてだったっけ？それは兄貴にしかならないと思うよ」

「いや、異能の力は把握してるんだけどさ。任意で使えないのは、あまりにも損だと思ってね」

「任意で使えないチカラなんて、聞いたことないよ。そんなチカラに、価値ってあるか？」

価値と言われると、どう答えればいいのか分からない。

異能が発現したってことは、喜ばしいことだと思う。

この世界の全人口の1%に仲間入りしたってことは、異能を持たない人達から羨望の眼差しを受けるといふことで。

異能者の中には他の“持たざる者”を見下している人も居るらしいから、そういう人達の対象にならないだけで価値はある気がする。そういう人達っていうのは大抵危ない力を持っていると、相場が決まっているし。

ただ、発現するに至るまでの過程とこれから目を付けられるかもしれないということを考えると、価値は一気に下がる気がする。

任意で使えないなら尚更だ。

「一応使うための条件っていうのがあるんだけど、頑張れば条件無しで使えるかもしれないから」

「だからコツを教えろと？」

「そういうこと」

「うーん……人によってチカラは違うから意味は……参考程度にしかならないぞ？」

「それでいいよ」

やっぱり僕も男だ。

異能というものには憧れがあっただけに、せっかくなら使いこなせるようになりたいと思うのが男として普通じゃあないだろうか。

「そうだな……兄貴、メビウスの帯って知ってるか？」

「メビウスの輪なら知ってるよ」

「それと同じやつだよ。そのメビウスの輪ってさ、どっちが表でどっちが裏だと思う？」

「表と裏？」

「そ。当てれなかったらアイスクリーム、奢ってくれよ」

自慢じゃあないが、中学卒業後すぐに就職した男だ。

頭には、自信がある訳がない。

無い知恵を絞って考える。

そりゃあやっぱり見えてる部分が表じゃないのか。

いや、場所によって見えてる部分が変わるに決まってる。

そもそも、表と裏とは一体何なのか。

やっぱり、僕自身が表と思う部分を中心に考えた方がいいんじゃないか。

あ。

少し、汚いことを思いついた。

答えと呼べるようなものじゃあないとは思うが、中卒の僕にこんなややこしいことを聞く透も悪いと思う。

「表を答えればいいよね？」

「答えれるならな」

「じゃあ、完璧な答えを見せてあげようじゃないか」

「はいはい、どうぞ」

莫迦にしたような笑みを浮かべる（というか完全に莫迦にしている）透に、莫迦な答えを投げ当てる。

「答えは、僕が思う表が表だ。間違いでは無いだろうか？」

ニヤリと口の端を上げて見せる。

僕の珍回答が予想の斜め上を行ったのか、透は使い古したパソコンのように固まった。

そして、くくくと小さく声を漏らす。

そこでもうやく僕が勝ち誇ったような笑みを湛えているのに気が付いて、声を大にして笑い始めた。

「ま、まさかそんな莫迦な答えが返ってくるとは！」

ひいひい悶えているところを見ると、どうやらツボに直撃したようだ。

ここまで目の前で笑い転げられると、顔に唾が掛かって何とも言えない気持ちになる。

いくら可愛い妹とはいえ、唾を掛けられて悦ぶ変態さんになった

覚えはない。

中々の量を撒き散らして満足したのか、笑うのはやめてくれた。

「確かに表だな、それは。だって表ということにしてるからな」

「だろっ？なら、この問題は」

「あ、うん。不正解」

「そうだろう、不正解に決まって……るんですねあれおかしいな？」

「兄貴はメビウスの輪の表を答えたんだろっ？」

「う、うん。そうだけど」

「だったらそれは不正解だ。だって、メビウスの輪には表も裏も存在しないんだから」

おいおい。

これは一体どういうことなんだろう。

問題の提示の仕方からしておかしいじゃないか。

汚いのは僕だけじゃなかったようだ。

血が繋がっているとはいえ、そういうところは似なくてもいい。

「俺のチカラが空間に対するチカラだっていうのは知ってるよな？昔は空間を切り取るようなイメージでそのチカラを使ってたんだよでも、これがどうも上手くいなくてさ。そのときの考え方っていうのが、文字通り切るようにチカラを使うっていうやつ。この世界を表として、裏の空間を切るイメージでこっちに持ってくるようにしてたんだけど、まあ俺には合わなかったんだろっ。で、どうしようかってなったときに、メビウスの輪の性質ってやつを知ったんだよ。アレには表と裏という概念自体がない。それを知って、空間はアレと同じものだと考えて使ってみることにした。結果はすぐに出たよ。何と言えはいいか……あれだ。擦じるっていう感覚が一番近いかな。この世界と俺のチカラの境界を取っ払った。切るってやり方のときは文字通り空間を切ることしか出来なかったけど、今は切

る以外にも曲げる、押し潰す、変えるとかも出来るようになったよ」

「大体は分かっただけど、変えるっていうのはどういうこと？」

「その空間に手を通す込むと火が点くとか、そういうこと」

「何と、まあ……」

もう、何でもありだ。

改めて、異能というものの特別さを見せられた気がする。

「もちろん、そういうのには時間が掛かる。マッチに火を点けるのに一分掛かるからな、それなら普通に点けた方が明らかに早い」

「でも、格好良いじゃないか、そういうのって。浪漫に満ちてるよ」

「兄貴に褒められると何か痒くなるな……まあ、だからイメージの仕方っていうのはかなりでかいと思うよ。上手くいったらいつでも使えるようになるんじゃないの？」

「そうかもしれないね。まあ、模索してみるよ」

「頑張れよ、兄貴。それで、兄貴のチカラって一体何なんだよ」

「言っていないかったかな？生存だよ、生存」

透は言っている意味が分からなかったのか、きよとんとしている。一般的に阿呆面と呼ばれるものだと思うのだけど、可愛さが出てそれすら絵になってしまふ。

それが何だか悔しく思う。

男だけ。

「生存？」

「そう。生きるっていう力だよ」

「生きるって、また何とも言えないような……いや、それは凄くないのか？」

「うん。かなり、というか物凄く良い力だと思うよ」

「俺のチカラと交換しないか兄貴」

「出来る訳ないじゃないか。それに、任意で使えないって言うてるよね」

「ああ、そうだな。物凄く損だな」

目覚まし時計がけたたましく自己主張して、それを透が殴って止めた。

「もうちょっと優しく殴ってあげようよ」

「うん。今度からは優しく打つことにするよ」

時刻は8時。

「高校、行かなくてもいいの？」

「何言ってるんだよ兄貴。今日から夏休みだぜ？」

「あ、そうなの。まあ、僕は遅れる訳にはいかないからね」

扇風機の風如きでは太刀打ちできない蒸し暑さに足を引っ張られながらも、なんとか体を起こして布団から出た。

……どうやら足を引っ張られたのは比喻では無かったらしい。

「離してくれないと仕事に行けないんだけど」

「俺も一緒に行く」

「え？何か用でもあったかな？」

「暇すぎるんだよ。家に居たら腐っちまう」

「勉強とかすればいいじゃないか」

「夏休み初日から勉強なんて、楽しくない。別に、俺は莫迦じゃないしね」

「うーん……でも、朱音<sup>あかね</sup>さんが何ていうか……」

「アイツなら別に良いって言うと思っぜ。言わなくても居座るけど」

どうして朱音さんに対してこう刺々しいんだろう。初めて会ったときからだから、根本的に合わないんだろうか。

「アイスクリームも奢ってもらわないといけないし」

「いけないって……あれは汚いと思うよ」

「兄貴がちゃんと答えてたら無かったことにするけどさ。兄貴だつて汚いことしたじゃん」

「う。……それは言わない方向でお願いしてもいいよね」

「駄目だね。それに……」

嫌な予感がする。

こういうときは大体押し切られると相場が決まっているんだ。

「……一人は寂しいじゃないか」

ほら。

可愛い妹にこんなことを言われて断れる男は、兄ではないと思う。

兄貴と一緒に外に出て15分。

噂の殺人鬼がこの街に来たなんていう、二人でわいわい話すにはどう考えても合わない話題を口にしつつ、兄貴の横顔を見る。

髪を切るのが好きじゃないという良く分からない理由で後ろで纏められた黒髪は、もう背中 of 辺りまで伸びてきている。

女みたいに長い髪だとよく言われるらしいけど、全体的に女みたいだと思う。

中性的……というより若干女寄りな顔に、細い体。

仕事のためとかいって5年間鍛え続けた体は綺麗だとは思っけど、全体的に細い線は何も変わっていない。

正直、少し化粧でもすればスポーツ少女にしか見えなと思う。

しかも美人の。

そんな、初めて告白された相手が男という残念な経歴を持つ兄貴を、俺は愛している。

愛していると言っても、性の対象として見ることはない。

まあ、行き過ぎたブラコンとかそこら辺で止まっていると思う。

俺だからここまで行ってしまったのかもしれないけど、俺以外が妹だとしても兄貴を嫌う妹なんて居ないだろう。

親父とお袋が死んで、兄貴が俺を食わせるために仕事を始めたんだから。

そのとき10歳だった俺は、二人が死んでからいきなり相手をしてくれないようになったことで寂しさでかなりヤバイ状態になってたけど、理由を知って兄貴を見る目が変わった。

俺が呑気に高校なんて行っていられるのは、兄貴のお陰な訳だし。

兄貴の腕に抱きつきながら、他愛もない話をする。

結構な数の視線が刺さるけど、周りからは恋人にでも見えている

のだろうか。

多分原因は腕を絡めているところと、俺が笑顔なことかな。

夏休みぐらいしか長い間一緒に居られることはないから、笑顔になるのは仕方ないことだと思う。

兄貴と居られる時間が少なくなるから高校をやめようと本気で思ったこともあるけど、兄貴が哀しむから残念ながら面倒な高校生活を続けている。

兄貴と一緒に外に出て20分。

嫌な顔と会った。

此処に来るのが目的だったから必然だけど、会いたくないものは会いたくない。

兄貴が居なかったら切ってるぞ。

「ん？今日は二人か。……そうか、夏休みだったな。随分とラブラブじゃないか。微笑ましいね」

「黙れよ、朱音」

「……おいおい。お母様と呼べお母様と」

「誰が呼ぶか！朱音をそう呼ぶなんて死んでもお断りだ！」

日野谷朱音。

忌々しいことに美しい茶髪を肩で揃えて、忌々しいことに抜群のプロポーシオンを持つ女。

赤を基調とした服装を着こなしているこいつは、男装の麗人っていうやつか。

腕を組んでこちらを見る姿がむかつくほど似合っている。

そして、誠に遺憾ながらこいつは俺の養母である。

親父との縁で親代わりになったんだが、29のこいつが45の親父とどこでそんな縁が出来たのか気になる。

一回聞いてみたら、お母様と呼ぶなら教えてもいいとか言っただけだ。狂いだしたから謎のままだ。

まあ、こいつを嫌いになったのには訳がある。時期が悪かったのだ。

二人が死んで、兄貴が構ってくれなくなったときにこの女が来たからだ。

こいつが兄貴を俺から遠ざけた奴かと10歳ながらに思ったのだ。兄貴の仕事先が此処だから強ち間違いではないけど、どっちかという仕事をくれた良い奴なのだ。

良い仕事かどうかは別として。

一回勘違いしたときの嫌いって感情が今日までずるずると付いて来ているということだ。

根本的に好きになれない奴なんだろう。

俺が睨んでいるというのに悠々としているところなんて特に嫌いだ。

これで強い異能者というのは世界が間違っている証拠だ。

そんな俺と朱音を見てあたふたする兄貴。

多分、俺と朱音と兄貴の三人の中では一番兄貴が女っぽいんじゃないだろうか。

「ほら、透落ち着いて。朱音さんも煽らないでくださいよ」

兄貴に仲裁に入られて、ムツとする。

それじゃあ俺が莫迦みたいじゃないか。

「俺は落ち着いてるぜ兄貴。おかしいのは朱音の方だ」

「別に煽ってなどいないぞ兄貴。透がお母様と言わないのが悪いんだ」

兄貴は困ったような顔をする。  
主に、朱音の発言について。

「二人とも子供みたいなこと……というか朱音さん、兄貴って言うのはちょっと……」

「……ああ、すまない。お兄ちゃんの方が良かったか？」

「そういう意味で言ってる訳ないじゃないですか……」

「いいじゃないか、お兄ちゃん。こういうの、嫌いか？」

「まだ兄貴の方がマシですよ……」

「ふむ。分かったよ、兄貴」

こうやって兄貴を弄るところも大嫌いだ。

こいつと居ると、時間が異様に長くなる。

昼の休憩でアイスを買ってもらうまで、あと4時間。

「はあ……噂の殺人鬼を捕まえると」

朱音さんの仕事は異能を使った犯罪専門の逮捕屋だ。

何故逮捕屋なのかというと、逮捕した後は警察に丸投げするからである。

警察も逮捕してくれればそれでいいらしい。

らしいというのは、僕がやる仕事は調査だけで逮捕とかその他諸々は朱音さんがやるので、そこら辺の仕組みはまだよく分かっていないからだ。

なのになんとして僕が調査から逮捕まで全部やることになっているのか、さっぱり分からない。

「そうだ。前の依頼のときに異能が発現したそうじゃないか。いけるだろう」

巷で大人気の殺人鬼さん。

どうやら人気者は異能者のようだ。

だからこの街に居る間に捕まえてくれと、簡単に言っとさういうことらしい。

「僕に殺人鬼と戦えということですか？」

「いや、捕まえると言っているんだ。不意打ちなりなんなり、ご自由にといい訳さ。まあ、殺したことのない君の不意打ちなんて、殺人鬼には簡単に気付かれるだろうがね」

「朱音さんが手伝ってくれたりは？」

「私は別の要件がある。残念だが、君が頑張ってくれ。君なら出来るだろう」

全体的に投げやりな言葉しか返って来ないのは、どういふことなんだろう。

壁と話しているような気がして、少し落ち着かない。

少し黙っていると、透が口を挟んできた。

「俺は反対だぜ。そいつ、もう15人も殺してるんだ」

「そうか？捕まえるだけでいいんだよ？殺さなくてもいい」

「……あのさ、兄貴ってかなりずれてるよな。兄貴が殺すかどうかって問題じゃないよ。兄貴が殺されるかもしれないっていうのが問題なんだ」

「うーん……でも、僕の力は生きる力だから大丈夫だよ」

「自由に使えるならな」

「う。……そう言われると、何とも言えないんだけどね」

透がこんなに心配しているのなら、辞めようかな。

受けることを拒否しようとした僕の心は、一瞬にして砕け散った。

「金は、いつもの三倍出すよ。どうする？」

「やります」

理解する前に口が動いていた。

金への執着、恐るべし。

「兄貴！」

「大丈夫だよ。透が僕を信じられないなら辞めるけど」

「……兄貴って、時々汚いよな」

「お互い様だよ。兄妹なんだから」

「……俺、帰るよ」

機嫌を悪くしたのか、足早に玄関に向かう透。

どういっ声を掛けるか迷っているうちに、逆に声を掛けられた。

「アイスの約束、全部終わってからでいいから」

「うん。分かったよ」

「……帰って来ないと許さないからな」  
「うん。分かってるよ」

遠くなる足音をBGMに、メイン音声が届いてきた。

「頑張りなよ、お兄ちゃん」

うん、これは予想済み。

「お兄ちゃんはやめて下さいと言ったじゃないですか。あまり年下を苛めたらいけないと思いますよ」

「別に苛めてる訳じゃないさ。……ただ、君は本当にお兄ちゃんなんだ。死ぬんじゃないぞ」

ああ、これは予想外。

ちよつと何言ったのか理解できない。

「今、何と仰いました？ちよつとおかしい言葉が届いてきた感じがして」  
「だから、死ぬなと言ったんだ」

「朱音さんも、心配したりするんですね」

「……君ね。私を何だと思ってるんだ。茶化す場所じゃないよ今のところは」

「大丈夫ですよ」

能力が無くても、同じことを口にしていただけと思う。  
昔から変わらないこと。

「死ねませんから。可愛い妹を残して死ぬなんて、兄じゃないですよ」

朱音さんが顔を赤らめる。

こんなに珍しいこともあるのか。

ケータイを机に置いたのが悔やまれる。

これを撮れたら、少し強く出れるんじゃないのか。

あ、駄目だ、燃やされる。

「何だ、格好良いこと言うじゃないか。死にませんなら殴っていたよ」

「どうしてですか？」

「そういうことを言う奴は大体あっさり死ぬからな」

「そうなんですか。それはそうと、一つ質問していいですか？」

「うん？何だ？」

「どうして顔が赤いんですか？」

「……ッ！」

おお、もつと赤くなった。

透も可哀想に。

もう少し居れば良かったんだ。

「……君ね。大人をからかうもんじゃないよ」

「僕だって大人ですよ。それに、偶には反撃しないとやられちゃいます」

「そうかい。まあ、死なない程度に頑張りな」

「そうします」

そう言っつて、朱音さんは炎に包まれて消えていった。

朱が消えた痕には、白いファイルが残されていた。

殺人鬼について纏められたファイルを拾いながら、僕は思っつ。

素直じゃないなあ、あの人。

「……理解出来てねえと思うから言い変えてやるけどよ。お前の妹、殺人鬼って

朱音さんの優しさを読み始めて2時間。

動かないことには始まらない。

とりあえず、情報屋に電話を掛けることにする。

折角の高収入を情報屋に流したくはないから、情報代を一切取らない優しい人のところに掛けることにしよう。

僕が強く出れる相手でもあるし。

ブルルという音を聞きながら、静かに待つ。

……長いな。

あの生徒会長サマがケータイに出ない場合は、大体2パターンの理由がある。

何処かにケータイを置き忘れたか、単に出たくないだけ。

後者のパターンは、今のところ僕以外にはまだ居ないと思う。

ケータイから流れる音は、遂にピーと言う音の後に喋れと語ってきた。

そっちがその気なら、お言葉に甘えてやろうじゃないか。

「あー、もしもし。僕だけど。どうせ今聞いているんでしょ？早く出た方が身のためだと思うよ。もし出ないと言うなら、あのと時の話をしよう。ああ、こっちにも人が居るから仁美ちゃんのあのことは一人歩きするかもしれないけど、まあそれは仕方ないということ。今聞いていなかったらご愁傷様だ。あと10秒ぐらいだからもう言うよ？仁美ちゃんはそのとき僕の胸に跳び込んで」

おお、電話に出てくれたぞ。

なんて優しい女の子なんだ、お兄さん感激だよ。

こんなに荒々しい息ということは、走って出てきてくれたのだろ

うか。

なんて素晴らしい女の子なんだ、お兄さん感涙だよ。  
とりあえず。

「おはよう仁美ちゃん。いや、11時ってこんにちはになるのかな？」

「少し声を抑えて下さいな。周りに聞こえてしまいますわ」

「欧野おのってまだ夏休みじゃないの？妹の高校は今日からなんだけど」  
「明後日からですわ。……こんなにつまらないことを話すために掛けてきたのなら、もう切ってもいいわよね」

「噂が歩いていいなら切ってもいいけど」

欧野女子高等学校。

共学化の進むこの時代では珍しい公立の女子高だ。

そして、欧野市の誇りらしい。

偏差値71の凄い高校なのだが、ちょっと複雑である。

もっと頑張れ、欧野の男子。

そのエリート校の生徒会長とオトモダチなのは、僕の密かな自慢である。

モデル顔負けの完成されたスタイル、輝いているのかと錯覚するような肌、何かキラキラしたものが見える気がする金髪、そして碧眼。

クウォーターの美貌は、エレガントな雰囲気醸し出している。

お嬢様という言葉を変換したら多分、こんな感じになると思う。

そして巨乳。

そう、巨乳なのだ。

透は貧……慎ましやかな胸をしていて、朱音さんも普通サイズ。

仁美ちゃんの胸には、男のロマンその他諸々がぎっしり詰まって

いるに違いない。

ただし残念なのは、金髪縦ロールではなく金髪ストレートだということ。

オホホホとか別に言わないのもマイナスポイントだ。

「……聞いています?」

「ん?何を?」

「……あなたはどうして私に掛けてきたのかしら。頭が痛くなってきましたわ」

少し考えことをして無視していたみたいだ。

僕としたことが、こりゃ失敬。

「頭が痛むのなら病院行った方がいいと思うよ。送ってあげようか?」

「あなたが近くに居たら余計に悪くなってしまいますわ。早く要件を言って下さらないかしら」

「ちよつと視て貰いたいことがあるんだけど。一躍人気者の殺人鬼さんの動向をね」

「そのようなモノを視て、一体私に何の得があるのかしらねクソ野郎」

おおつ。

中々に辛辣な言葉を頂いてしまった。

なんて口の悪い女の子なんだ、お兄さん吃驚だよ。

「今どこに居るの?」

「車の中だ。此処なら誰にも聞かれる心配はねえからな」

「運転手さんが聞いてるよ。生徒会長サマがサボりなんてしていいの?」

「アキラに聞かれても痛くねえし。大体、お前の声を聞いて受ける気なんて起こらねえよんなモン。うちは自由な校風が売りなんだよ」  
「自由すぎるよね。何でこんな学校が偏差値71なんだろう。ああ、猫被りも終了か。僕はあつちの口調の方が穏やかで好きだね」

「煩えな！さつさとくたばれクソ野郎！」

「そんなこと言っていていいのかな？こつちで大声で話したら皆に聞こえるんだけど、あの話でもする？」

もちろん、僕以外には誰も居ない。

オトモダチに協力してもらうためには、こつちいうことも必要なのである。

「Fuck off you piece of shit！」

「……消えるなんて言うけど、仁美ちゃんのところにはケータイしかない。そこに僕は居ないんだ」

「……お前、ホントム力つく野郎だな。ぶち殺してえなマジで」

「殺せなかった人が何を言っているのかな？仁美ちゃん、失敗したよね」

「煩えな！お前、俺を情報屋か何かと勘違いしてるだろ。な？してんだろお前よお！」

「してないよ。オトモダチだと思ってる。だからお金も発生しないよね」

「……チツ。さつさと喋れよクソが！アタシが視たことのない奴を視るには情報が必要なんだよ。お前もそんなくらい分かってんだろっがよ」

どつという顔で喋っているのか想像できるほど感情が表に出ている。美しい姿とか高級感溢れる雰囲気とか色々と台無しだ。

優<sup>ゆうが</sup>賀なんて名字だけど、優しいという文字が入ってるのはちょっと違っし優雅さも消えかかっている。

優雅なチンピラ生徒会長。  
何か本当に、残念。

僕の周りを見ていると美人って皆ちよっとおかしいのかと思って  
しまう。

朱音さん然り、仁美ちゃん然り。

あ、あと透も変だ。

あんなに密着する必要は無いよね、普通。

まあ、仁美ちゃんとはお友達にはなれないけどオトモダチで十分  
頑張っていると思う。

だって、結構つかれるから。

「うん。それじゃあ話すけど、メモの準備はオツケー？」

「必要ねえよ。さつさと言ってくれ」

「じゃあ言うよ。名前は」

とびかわ ゆづせ  
鳶川裕早、34歳。

家族構成は、嫁が亡くなり娘と二人。

趣味は麻雀と競馬の元大手会社員。

賭け事にのめり込む節があるが、仕事に関しては至って真面目。

28歳にして課長に就任、同期から疎まれることもなく人望も厚  
かった。

課長就任から3年ほど経った頃から、少しずつ意欲を失くしてい  
ったらしい。

恐らく、この頃に異能を発現したと見られる。

仕事に対する意欲を失くし、昨年10月27日に退職。

この1ヶ月前に嫁に先立たれ、父子家庭に。

6月13日に一人目を殺害。

昨日に15人目を殺害。

目撃情報があるが、ものすごい速さで上に飛んでいったと揃って

口にしている。  
精神病院に入院している娘は、パパが跳んでるとしか言わないらしい。

朱音さんのファイルには事細かに書かれているけど、要約するとこんなところか。

朱音さんって優しいんだと、信じ難いことに気が付いた。もう調べることもなんて何も無いってくらいの量だ。僕の仕事が楽になるのは嬉しいけど、何だか申し訳ない。

「これくらいで大丈夫？」

とても綺麗な声がケータイの向こうから返ってくる。  
綺麗なのは声と容姿だけだけど。

「莫迦だな、お前。大事なモンが抜けてんじゃねえか」

「殺された人の名前とかも必要？」

「違えよ。顔だよ顔。容姿のことに何一つ触れてねえじゃねえか。指名手配犯だつてのにニュースじゃ何故か顔出されてねえからな」

「指名手配しても普通の人じゃあ死人が増えるだけだからね。……」

ああ。顔写真、送った方がいい？」

「当たり前だろうがよお。切るぞ」

切れた。

メールで送れと、そういうことらしい。

仕方ないから送ってやろう、感謝するがいいなんて思いながら、件の男の顔を見る。

……非常につまらない。

これと違って特徴のない、優しげな風貌。

でもとてもつまらなそうな顔をしているから、見ているこっちまでつまらなくなってくる。

表情に出てくるなんてよく言うけど、つまらないものまで出さなくてもいいよ殺人鬼さん。

本文に可愛いよなんて打ってみたメールを送って一分弱。

お気に入りのインスタが流れ出す。

このまま聞いていたいけど、多分怒るから大人しく出てあげよう。切れるのはお肌に悪いから、僕は仁美ちゃんのために出てあげるのだ。

「もしもし。本文読んだ？」

「くたばれクソ野郎。つまらない本文とつまらない写真送るんじゃないよ」

「後者は裕早って人に言っただけよ。僕の責任じゃない」

「前者をどうにかしろよボケ。……今視てやるからな、感謝しろよ」

現在の動向が丸分かりなんて、何て汚い力なこと。

警察とかで働けばいいんじゃないのか。

少なくとも、生徒会長の力ではないよね。

何時でも何処でも生徒会長に監視されてるなんて、僕が生徒なら気が狂うな。

まあ、今日は素直に感謝しよう。

仁美ちゃんの協力が無かったら路地裏を探し回らないといけなかった訳だし。

「ありがとう、仁美ちゃん」

「う。……やめる。何か気持ちわりい」

「酷いなあ。……何が視える？」

「えっと……暗い。路地裏みてえだな、此処」

「路地裏で殺すらしいよ。もしかして、殺人現場だったりして」  
「ん。……それ、近えな。今、殺そうとしてるわコイツ」

……冗談で言ったつもりだったけど。

まあ、今からじゃどう頑張っても助けられないから、自力で頑張ってもらおう。

場所は教えてくれると思うから、支度してそろそろ向かおうか。

「んーと……女が襲われてるみてえだな」

「そんなことも分かるんだ」

「名前だつて分かるぜ。……日野谷透つて女だ」

「あ、それ僕の妹だよ」

「マジか？」

「うん。妹だ」

「……理解出来てねえと思うから言い変えてやるけどよ。お前の妹、殺人鬼つてヤツに襲われてるぜ」

「そうなんだ」

「あ。……今、刺された」

「そうなんだ」

ケータイが手元から消えた。

無意識に落としたみたいだ。

落としたことに気付かないなんて……僕はまだ21だ。

記憶があやふやになるのは、まだ早い。

落し物を拾いながら、ぼんやりとした頭で思う。

あ、うん、分かった。

これ、夢でしょ。

「君も、力使えるんだね！いやあ、これは良い意味で予想を裏切られたよ！」

ああ、失敗した。

怪しい人に付いて行ったら駄目だって言うけど、正しくその通りだな。

兄貴にアイスを買って貰えなくなったからコンビニのアイスを買に行こうと思ったことは、別に何も悪くなかった。

妖しい雰囲気纏ったスーツの男が路地裏に入るのを見たときも、別に大丈夫。

……アレは付いて来いって言ってるようなものだったから、仕方ない。

いや、付いて行ったら駄目なだけで、まあ、付いて行ってしまったら仕方ないと思う。

妖しい雰囲気の怪しい男に誘われると、自然とこうなる訳で。

……人間好奇心が招くモノは、碌なモノじゃないな。

路地裏に入った途端、後ろから斬りかかられた。

後ろを付いて行ったのに何故俺の後ろに居るかは分からなかったけど、ナイフ捌きは素人のそれ。

大丈夫、桐谷きじやよりはかなりマシだ。

右手を中心にイメージを拡大、直径60センチ程の正方形を創りだす。

振り向き様にナイフの切っ先に“箱”を当てて、一呼吸。

ナイフは“箱”の真ん中辺りで引っ掛かり、それを起点に男の腕へと伸ばしていく。

大丈夫、やれる。

肩まで空間が届いたとき、後ろからの物凄い風に“箱”と一緒に腕まで持つて行かれそうになった。

引きちぎれそうな感覚に慌てて“箱”を手放して足裏に展開、突風に耐える。

どうやら男が後ろに跳んだときに出来た風らしい。

こいつ、桐谷より危ないかもしれない。

あの一瞬で5メートル近く後ろに跳ぶってというのは、普通じゃない。

多分こいつが、兄貴の仕事の殺人鬼って奴だろう。突風の名残を感じながら、男を見る。

何の感情も映さなかった顔が、妖しく歪んでいく。

そして、ケタケタ嗤いながら気色悪い声を吐き出した。

こいつ、色々とおかしい。

穏やかな声色なのに、乗せているモノが気持ち悪い。

大体、何で俺がチカラを持つていることを喜ぶんだ。

殺人鬼って奴は、人を殺したいだけじゃないのか。

何で抵抗出来る奴を歓迎するんだ。

チカラを使って暴りたいようにも見えないのに、当たり前のように

に襲ってきた。

殺すことを愉しむものなのに、つまらなそうに斬りかかってきた。殺人が目的に見えない殺人鬼。

やっぱり、おかしい。

残念ながら路地裏の出口はこの殺人鬼の向こう側にしか無いから、どうにかして位置を入れ替えないといけない。

それにはこいつの攻撃をあと一回は耐えないといけないけど、さっきの後退の速度と同じ速さで突っ込まれたら、確実にアウト。

完全に止めれる空間かへを創るには、1分必要だ。

それまで何とか時間を稼がないといけない。

さっきまで無だった男から、明確な殺意が滲み出す。

視線さつきに震える足を抑えて自己暗示。

大丈夫、やれる。

「ちょっと、聞かせて貰ってもいいか？」

「ん？何だい？」

8秒。

「どうして、人を殺すんだ？」

「殺すことに理由なんてないよ。そんなもの、コレには必要ない」

20秒。

「必要ない？」

「そう、必要ない。殺人を犯したという結果を求めている訳じゃないからね。殺人は過程だ。何かを為すための過程に過ぎない。分かるかい？」

37秒。

「……お前は何がしたいんだ」

「……いや、私が求めていることはとても単純なものだよ。特別なことなんて何一つ求めていないんだ。君だって思っていることだよ。

……それはね

「

56

衝撃。

衝撃、突風。

衝撃、突風、後退。

体を壁に叩き付けられるような暴力に脳を揺さぶられる。

伸ばした両手に遠いところから空間が瓦解かへしていく。

衝撃で体が浮いて、後ろに運ばれる。

2メートル近く在った空間かへも、もう30センチ程しかない。

壁に頭を強く打ちつけられて、瞬間、意識が飛んだ。

俺と殺人鬼の間には、もう何も無かった。

勢いも完全に殺せたけど、これじゃあ意味がない。

胸の前で構えられたナイフが、少しづつ近づいてくる。

必死に抵抗するけど、成人男性と女子高校生の純粹な力の差はど  
うしようもなかった。

「……ただ、楽しみたいんだ」

ああ、失敗した。

ナイフが胸に突き刺さる。

体を鈍い痛みが支配していく。

嗤った顔が脳に絡みつく。  
セカイが闇に塗り潰されていく。

痛みが鐘を忙しなく鳴らす頭で、必死に考える。

この男、勝ったと思つて良い気になつてやがる。

確か、兄貴がこいつを捕まえなきゃいけないかつた筈だ。

なら、一泡吹かせないと気が済まない。

俺のためにも、兄貴のためにも。

動かなくなつた左手の分の、思考を右手に明け渡す。

掴んだままの男の腕に、右手の意思を流し込む。

視界を黒に奪われる前に、お前の片手を奪つてやる。

消えそつなセカイの中で、必死に必死に自己暗示。

大丈夫、やれる。

「アキラ、そこを右だ」

「畏まりました」

大金持ちの代名詞のようなリムジンに乗って、件の場所を目指す。運転手のアキラさんは、どう考えてもヤの付くお方にしか見えなけれど、とっても良い人なのだ。

仁美ちゃんの専属ボディガードでもある。

「いやあ、乗せて貰って良かったのかな？」

「お前のためじゃねえよ。お前の妹、俺の後輩だったからな。見て見ぬふりは出来ねえよ」

「あ、もしかして今流行りのツンデレってやつかな？仁美ちゃん、可愛いね」

「んな訳ねえだろボケ」

嘔吐け、一回デレたじゃないか。

完全に五分五分のツンデレですよ仁美ちゃんは。  
九割五分と五分だけど。

「……お前、ちよつとは落ち着けよ」

「何を言ってるんだ仁美ちゃん。僕は凄く冷静だよ」

仁美ちゃんったら変なことを言うなあ。

冷静だけど何だか熱いな、どうしてだろう。

「手から血を流してる奴が何言ってるんだ。お前莫迦か？」

おおっ。

何故か爪が食い込んでたよ不思議だね。

「あれだよ。血沸き肉躍る戦いが僕を待ってるから、血液が先走っ

「ちゃったんだ」

「……落ち着け。お前の妹はまだ生きてるって言ってるだろ」

透はまだ生きてる。

仁美ちゃんが視たことによると、ナイフを刺した後何故か鳶川裕早は止めを刺さないで笑っていたらしい。

でも、いつ殺されるか分からないじゃないか。

そんな状況で冷静な僕を褒めるべきだと思う。

「大丈夫、まだ殺つてねえ。お前の妹から離れて行儀良く座ってるよ」

「いつ気が変わるか分からないでしょ。妹を心配して何が悪いんだ。おおう。血がドバドバ出てくるよ。どばどばどばーん」

「大分頭にキてるなこれは。お前、妹のことになると我を忘れるクチか？」

「妹が刺されて何も変化が無い奴なんて、居たら殴ってるよ」

「アタシだって殴ってるよ」

「ねえ、後何分？後何分かな？」

「あと一分もねえよ」

笑顔になると心も笑うなんてことを政治家が言っていたのを思い出す。

僕が落ち込むことを透は望んでないと思うから、笑顔になることにしよう。

にーっ。

ちょっと歪かもしれないけど、まあこれでも十分だと思う。

世にも恐ろしい殺人鬼さん。

世にも恐ろしいお兄ちゃんが、相手をしてあげよう。

クタバレ、クソ野郎。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2859ba/>

---

生きる。

2012年1月9日13時51分発行